

## 第5回ヒロシマ展「骨を掘る男」上映会

ごあいさつ

2021年、出店本屋「燈日草」のはじまりとともにスタートした「ヒロシマ展」。最初の3年間は、広島平和祈念資料館からお借りしたパネルでの展示、去年は埼玉県にある「原爆の図 丸木美術館」から、「原爆の図」（原寸大複製画）をお借りして展示を行いました。そして、5回目となる今回のヒロシマ展は、「骨を掘る男」の上映会を開催することに決めました。沖縄戦の戦没者の遺骨を、40年以上にわたり収集し続けてきた具志堅隆松さんの姿を追ったドキュメンタリー映画です。

今から20年前、私は沖縄県南部の戦跡を巡る旅をしました。当時の日記をもとにした『降りながら、照る場所へー沖縄・祈りの地を歩くー』という小さな本を2021年に自費出版したのですが、具志堅さんの存在を知ったのは、その執筆中でした。

沖縄戦終盤、多くの人が逃げ場を失い追い詰められた本島南部には、犠牲になった方々の遺骨が、今も土のなかに混ざり埋まっているという状況があります。その土を、辺野古新基地建設で海を埋め立てるための土砂として使うという防衛相の計画があり、それに抗議しハンガーストライキをしていたのが、具志堅さんでした。あまりにひどい計画に愕然としながら、具志堅さんの姿を見て、必ずこの本を完成させようと力が湧いたことを思い出します。

その翌年2022年1月、具志堅さんが、東日本大震災で行方不明になっている方の捜索を大熊町で行い、遺骨が発見されたという新聞の記事を目にしました。本の完成当時はためらっていたのですが、手紙と一緒に『降りながら、照る場所へ』を送らせてもらうことにしました。しばらく経ったある日、知らない番号からの電話に出てみると、「具志堅です」と。驚きました。具志堅さんは、わざわざ電話をかけて本の感想を伝えてくださったのです。

今年の3月、沖縄に行きました。「きれいだな」と海を眺めながら、何気なく目にしていたたくさんの船が、辺野古の埋め立てに使う土砂を運ぶために待機しているのだと気がついたとき、私は無自覚で浅はかな自分に落胆しながら、沖縄の人たちが、この光景を目の当たりにして暮らしているのだという現実の残酷さに、言葉を失いました。どんなに反対の意思を示しても、土地は削られ、海には土砂が流され、7万本もの杭が打ち込まれていく。これは、人の心を殺すようなことじゃないかと。8日間の旅のあいだ、沖縄からたくさんの声と問いを受けたことを感じます。目にして、知って、そして、あなたはどうするのかと。「骨を掘る男」上映会開催は、沖縄に対する、自分なりの応答でもあります。

具志堅さんは、亡くなった人々により近づこうとする自らの行為を「行動的慰霊」と表現しています。「骨を掘る男」の上映会を開くこと、そして会場に足を運び、映画を観ていただくことも、「行動的慰霊」のひとつになり得るのではと感じています。沖縄慰霊の日である6月23日を前に、21日の上映会を、みなさまひとりひとりの慰霊の場としていただけますように。ご参加をお待ちしています。

菅家 洋子（燈日草）